



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

牛肉輸入自由化の及ぼす国内牛肉経済への影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-06-08 キーワード: 作成者: 飯田, 隆, 古川, 暁, 小栗, 克之, 杉山, 道雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/5682

牛肉輸入自由化の及ぼす国内牛肉経済への影響

飯田 隆・古川 暁・小栗克之・杉山道雄

生産流通管理学講座

(1993年7月20日受理)

Effect of Beef Liberalization on Japan's Beef Economies

Takashi IIDA, Akira FURUKAWA, Katsuyuki OGURI and
Michio SUGIYAMA

Department of Production and Distribution Management

(Received July 20, 1993)

SUMMARY

Japan's beef liberalization started April, 1991. The purpose of this study is to clarify the effects of beef liberalization on Japan's beef economies. In order to do this, several governmental and industrial data are collected and analyzed.

Several effects of the liberalization on Japan's beef economies are as follows:

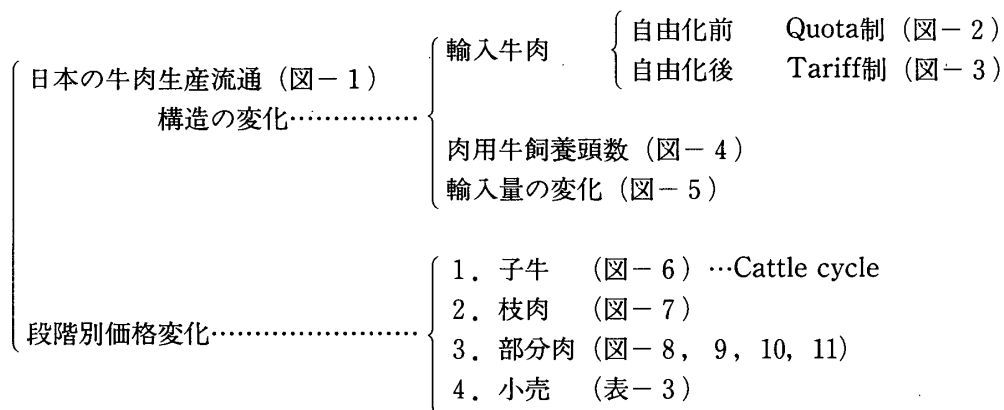
- 1) The price of dairy beef (carcass basis) has consistently declined as imported beef has increased because the imported beef price is low when the quality is quite the same, but Wagyu (Japanese black) beef prices have not declined.
- 2) Baby calf and heifer prices have fallen dramatically, and the income of dairy farmers has decreased.
- 3) Portions such as shoulder clod, brisket deckle off and bottom round have shown a sharper price decline than strip loin.
- 4) However, the retail price has not declined as much as for baby calf, heifer, cattle at the fattening stage (production stage), carcasses and portions (marketing stage).
- 5) The reasons for the above are the many beef marketing channels and several marketing stages found in Japan.
- 6) Marketing and distribution channels should be rationalized and made cost-effective in Japan.

Res. Bull. Fac. Agr. Gifu Univ. (58) : 73—82, 1993

要 約

1991年4月に牛肉の輸入枠が撤廃され日本の牛肉市場は完全自由化された。

これにより国内牛肉経済の各段階にも様々な変化がもたらされた。自由化直後の、1992年度に早くも自給率が50%を割りこんだ。また、その価格面では部分肉価格でその品質で輸入牛肉と競合するといわれる乳用種のみでなく肉用種(和牛)でも価格低下を引き起こした。そのため牛肉の枝肉価格にも影響を及ぼした。また子牛価格においては予想以上の価格低下をもたらした。酪農業にも深刻な影響を与えている。その一方牛肉の小売価格は目立った変化を見せておらずここでも日本における食肉の複雑な流通機構の問題が浮き彫りにされた。現在コメ・リンゴ等の輸入問題が取りざたされている中、自由化が国内牛肉経済にもたらした影響を明らかにする事は今後の農産物輸入交渉において何らかのヒントを与えるものと考えられる。



牛肉自由化の影響について、先発的自由化(鶏卵, プロイラー)の先例からいくつかの類測がなされ¹⁾, さらに、米自由化への影響としていくつかの研究が発表されている²⁾, 特に国内牛肉については、肉用種(黒毛和種, 褐色, 日本短角種)や乳用種, F1など多様であるばかりでなく、土地利用型農業としての性格からいくつかの異なる側面を持っている。

種類別にみた場合外国産種が肉質上、日本の乳用種と同質であることを鑑み、乳用種肉以下の中級肉、下級肉への影響を発表し、和牛肉は上級肉なるが故に上昇、影響は少ないとみられている³⁾。

牛肉流通の各段階にみる場合、牛肉ほど流通が多段階でかつ多様な価格をもつものは少ないことが解明されてきた⁴⁾。従って、貿易の自由化が直ちに小売り価格の下落をもたらすとは限らない。本研究では自由化が流通段階別価格にどのように影響し、小売価格への影響はどうかを解明することを中心に、日本における牛肉流通機構の質的变化、つまり牛肉の自由化によってどのような品質のものが輸入され、それによりどのような流通形態への変化をもたらしたか。等の問題をあきらかにすることを目的とした。

研究の方法

牛肉の自由化の影響を輸入牛肉の品質を確定すること、牛肉流通が自由化前後でどう変化したか、Quota制から段階別関税制への変化については既存の文献資料から整理したが、流通構造の多段階性、複雑性については、今迄の当研究室での一連の研究成果を踏まえながら、それぞれの段階別価格を収集・集計した。とくにすべての段階別価格が整えられているわけではなく、農林水産省では枝肉価格まで、部分肉、小売価格は畜産振興事業団の公表の資料によっている。小売価格については統計そのものが充分でないが、しかし現状ではこれらのものから接近する以外方法はない。自由化前は主として1989~1990年を、自由化後は1991~1992年8月までを対象とした。

研究の結果

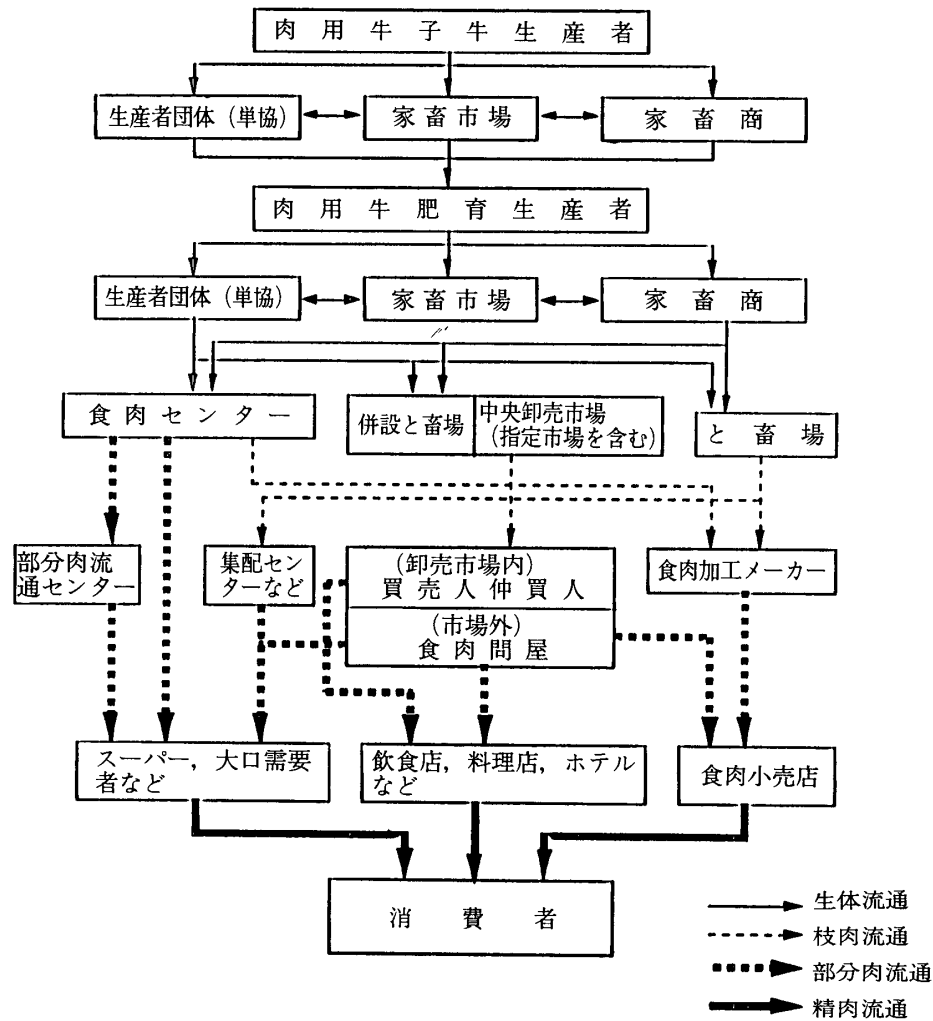
1. 日本における牛肉の生産流通構造

日本の牛肉の流通機構では、その生産段階において、ぬれ子・肥育素牛・肥育牛へと、加工流通段階では生体・枝肉・部分肉・精肉と次々にその形態を変えて流通している。またそれにとまって生産・流通の担当者も子牛生産者・肥育農家・出荷業者・屠場・食肉センター・小売業者へと変化する。

図-1はわが国における牛肉の生産及び流通経路とその形態を示したものである。生産段階では、和牛などの肉専用種の場合、子牛生産者とその子牛を肥育する肥育牛生産者が存在する。乳用種の場合は、酪農経営の副産物として子牛が肥育牛生産者に供給される。ぬれ子および肥育素牛は直接家畜市場に出荷するもの、家畜商や生産者団体を通して家畜市場へ上場するもの、家畜商・生産者団体を通して肥育牛生産者と直接取引されるもの等の流通経路をとる。

肥育牛生産者に渡った子牛は和牛であれば19ヵ月(670~700Kg)乳用種であれば14ヵ月(700~740Kg)まで肥育される。肥育牛は生産者団体・家畜市場・家畜商へと出荷され、その後各事業体によって屠畜場ま

図1 国産牛肉の流通経路



たは屠畜場を持つ食肉センター・卸売市場へと出荷される。出荷された牛は屠畜・解体された後、枝肉・内臓・皮・頭などに区分され、それぞれ直接または卸売市場を通して取り引きされる。

卸売市場併設屠畜場枝肉となった牛肉は食肉問屋において部分肉にまで加工され、スーパー・小売店などに流通する。また地方の産地食肉センターで枝肉・部分肉にまで加工された牛肉は、スーパー・加工メーカー等に流通する。他にも部分肉を専門に取り扱っている部分肉流通センターを経由してスーパーなどの量販店に供給される経路もある。この様にして各小売店・飲食店にまで渡った牛肉は、精肉加工・調理され消費者にまで渡ることとなる。

2. 輸入牛肉の輸入形態及び自由化前後の国内流通経路

輸入牛肉はほとんど部分肉の形で輸入される。また輸入牛肉は、その肥育方法・部分肉の保存方法の違いによって次のように分類される。肥育方法の違いによる分類では、穀物肥育牛肉 (Grain fed beef) と牧草肥育牛肉 (Grass fed beef) とに分けられる。前者は、肥育の仕上げ段階において一定期間穀物を給与した肉牛からとれる牛肉であり、これは主にアメリカから輸入されており、一部オーストラリアからも輸入されている。それに対し後者は、牧草のみで肥育した肉牛からとれる牛肉で、主にオーストラリアから輸入されている。

次に保存方法の違いによる分類では、冷蔵牛肉 (Chilled beef), 冷凍牛肉 (Frozen beef), エージドビーフ (Aged beef) に分けられる。冷蔵牛肉は、部分肉を真空包装してほぼ0℃に保存された牛肉である。

表1 牛の肥育方法の違いによる分類

種別	穀物肥育牛肉（グレインフェッドビーフ）	牧草肥育牛肉（グラスフェッドビーフ）
肥育方法	仕上げ段階で、一定期間穀物を給与して肥育した肉牛からとれた牛肉で、主としてアメリカから輸入されており、一部オーストラリアからも輸入されている。肉質は国産の乳去勢牛肉に相当する。	牧草のみで肥育した肉牛からとれた牛肉で、主にオーストラリアから輸入されており、一部ニュージーランドからも輸入されている。
特徴	①適当に脂肪を含み、柔らかく風味もよくおいしい。 ②コストがかかっているため価格は高い。	①一般的に穀物肥育のものと比較して脂肪が少なく、肉も固く風味に乏しい。 ②コストが安いいため価格は安い。

保存法の違いによる分類

種別	冷蔵牛肉（チルドビーフ）	冷凍牛肉（フローズンビーフ）	エージードビーフ
保存方法	通常部分肉を真空包装して、ほぼ零度に保存された肉。	屠畜後、部分肉にして直ちに急速凍結した牛肉。	真空包装した部分肉を一定期間温度を0℃に維持し、熟成した後で急速凍結した牛肉。
特徴	①保存中に熟成が進むため柔らかい。 ②冷凍牛肉に比べてシェルフライフが短い。 ③保存、取扱いに細心の注意が必要。	①熟成がなされていないため、硬く風味が十分出していない。 ②シェルフライフが冷蔵牛肉に比べ長い。	冷蔵牛肉と冷凍牛肉双方の良い特徴を有している。熟成された風味の良い状態を長い期間維持できる。主にオーストラリアから輸入されている。

資料：全国食肉事業協同組合連合会「輸入牛肉のハンドブック」〈Part 2〉

冷凍牛肉は、屠畜後部分肉にし、ただちに急速冷凍した牛肉である。エージードビーフは、真空包装した部分肉を一定期間0℃に維持し、熟成させた後に急速冷凍した牛肉である。

ここにあげた5種の牛肉の特徴はまとめて表-1に示した。

図-2は、牛肉輸入自由化直前の輸入牛肉の流れを示したものである。

輸入自由化前は、政府がアメリカ・オーストラリアなどとの間で協議を行い、一年の上半期、下半期の2回輸入割当量（牛肉輸入枠）を決定し輸入する輸入割当制度がとられていた。輸入された牛肉はその割当量に従い、一般枠と特定の需要と結びついた特別枠に分けられる。特別枠は、ホテル・学校給食・沖縄特別枠等に用いられるものである。一般枠は輸入総数の9割を占めており、一般枠のうち約1割は民間において自由取引が可能な部分である。残りの9割は畜産振興事業団が商社を通じ輸入し、国内生産を保護するために、市況をみながら逐次市場に放出し国産牛肉の価格安定化を図っていた。このような価格安定操作は市場への上場量を調節することによって行われ、その量は国産牛肉の卸売り価格・肉牛生産・需要動向・輸入牛肉の部位別需給などの要素を総合的に判断することによって決められていた。

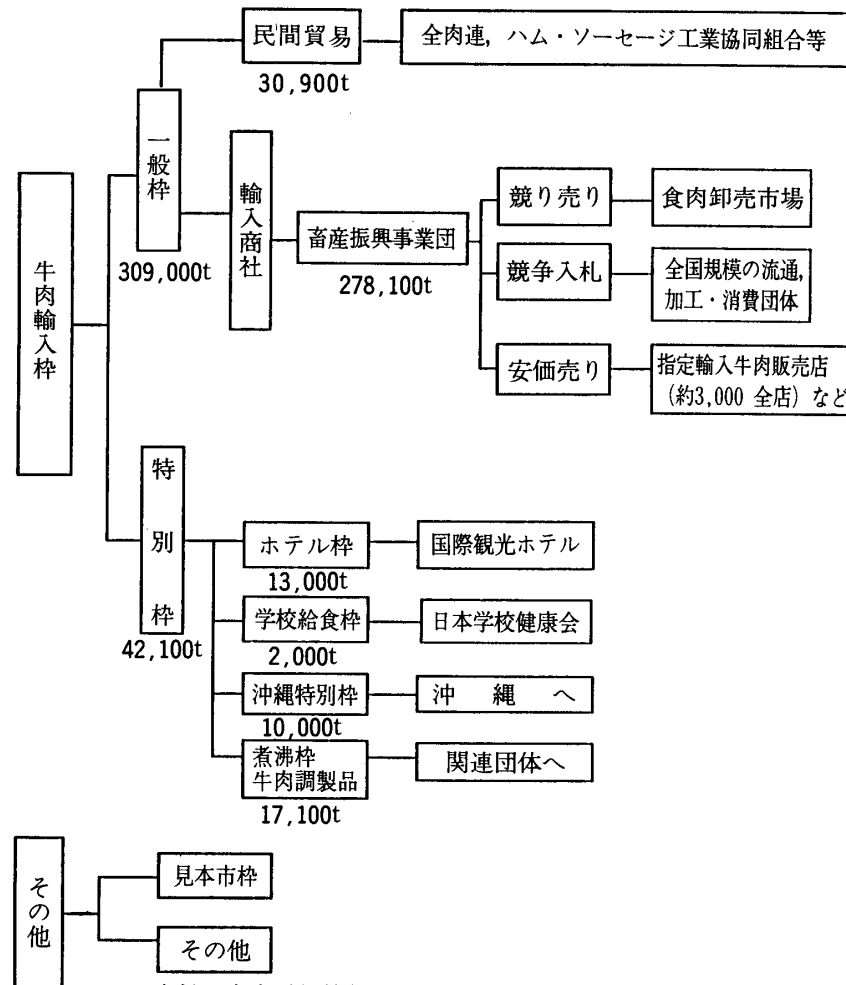
図-3は牛肉自由化後の輸入牛肉の流れを示したものである。

牛肉の輸入段階は、大きな国内販売シェア・流通網を持つ大手食肉資本および大手スーパーが行う直接買い入れ、商社が独自に行う輸入、中小規模需要者が商社を介して行うもの（輸入業務委託）とに大別される。次に輸入された部分肉の加工・流通段階では、大手食肉資本によって輸入されたものは、自社で加工した加工品もしくは部分肉のまま自社の流通網に乗せ小売店・量販店に売り渡す経路、または部分肉のまま加工を受け持つ食肉加工メーカーがそのローカルな販売網を通して販売店に売り渡す経路などがある。

大手スーパーによって輸入されたものは、自社流通・加工センターまたは直接店舗に持ち込まれ精肉加工された後消費者に渡る経路をたどると考えられる。

これに対し中小加工業者の原料入手は、商社経由の買い入れ、食肉専門商社からの買い入れ、国内市場

図2 牛肉輸入自由化前の輸入牛肉の流れ



資料：食肉通信社調べ

注：各数値は平成1年度割当数量

における買い付け等に頼っている。入手された部分肉は精肉加工および業務用加工され取引関係のある小売店・量販店・外食産業に売り渡している。その他の流通では、比較的大規模の外食産業が原料部分肉を自社輸入および商社経由で輸入し自社専用加工場（セントラルキッチン）において業務用加工し店舗において調理販売している例や、生協等の消費者団体が一貫して輸入・加工・販売を行っているというような例もみられる。

3. 輸入自由化前後の牛肉の国内需給の変化

国内肉用牛飼養状況を図-4に示した。これを見ると1950年代から高度成長に伴う需要増から肉用牛飼養頭数は常に増加傾向を示してきた。しかし図-4からもわかるように、1988年に決着された牛肉輸入自由化交渉前後において初めて、特に乳用種肥育牛の飼養頭数が減少した。これを直ちに牛肉輸入自由化の影響と判断することはできないが、その重要な一因であると考えられる。

また日本の牛肉生産量および輸入量の推移（図-5）をみると、国内生産量草加と比較して牛肉輸入枠の増加にともなう輸入牛肉量の増加がめだつた。1991年における牛肉輸入量の減少は、自由化初年度の高関税（70%）により輸入が差し控えられたことと、各業者がこの時期を手持ちの在庫の調節期間ととらえていたことによると考えられる。

4. 牛肉自由化前後における流通の段階別価格の変化

1) 子牛価格の変動

図 3 輸入牛肉の国内流通経路・・・自由化後

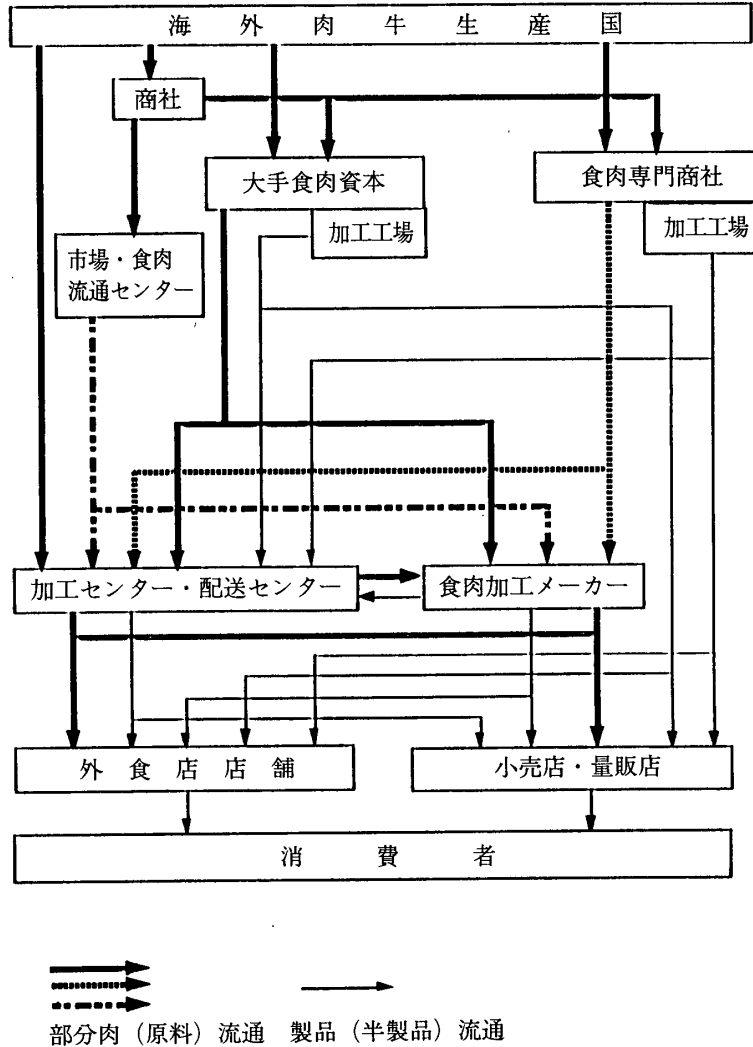
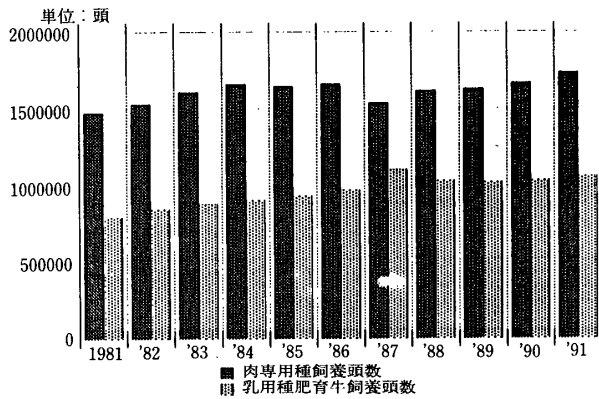
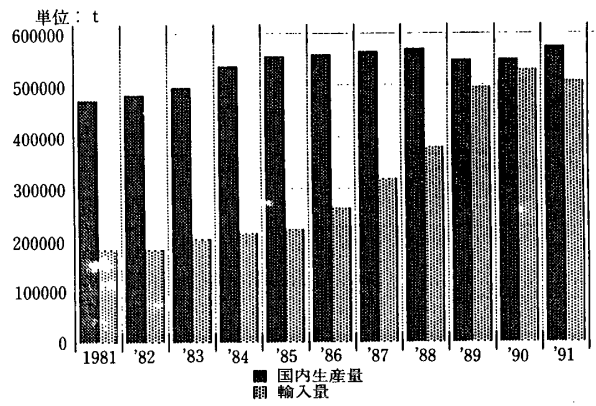


図 4 日本国内の肉用牛飼養頭数



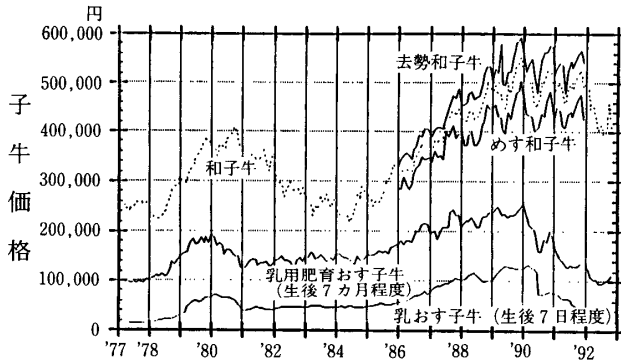
資料：農林水産省統計情報部「畜産統計」

図 5 日本の牛肉生産量および輸入量の推移



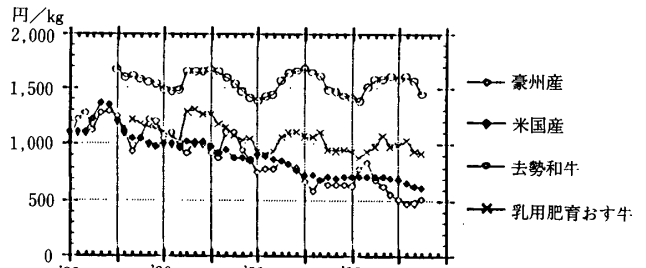
資料：食肉通信社「'93 数字で見る食肉産業」p47 p49.

図6 各種子牛価格の変動



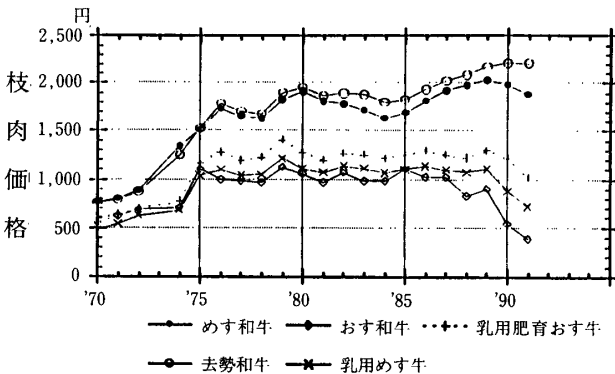
資料) 農林水産省統計情報部「食肉流通統計」
「食肉流通統計月報」
「農村物価賃金統計」
畜産振興事業団「畜産物市況週報」

図9 「かたばら」の価格変動



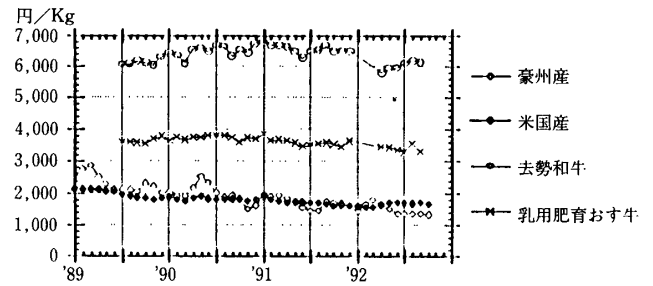
資料) 畜産振興事業団「畜産物市況週報」, 日本食肉流通センター「業務月報」食肉通信社「'91 数字でみる食肉産業」「'92 数字でみる食肉産業」

図7 中央卸売市場における各種枝肉価格の変動



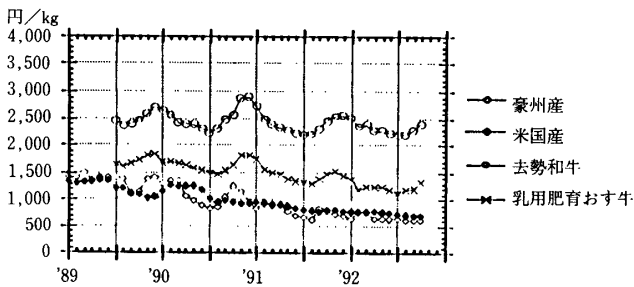
資料) 農林水産省統計情報部「食肉流通統計」

図10 「サーロイン」の価格変動



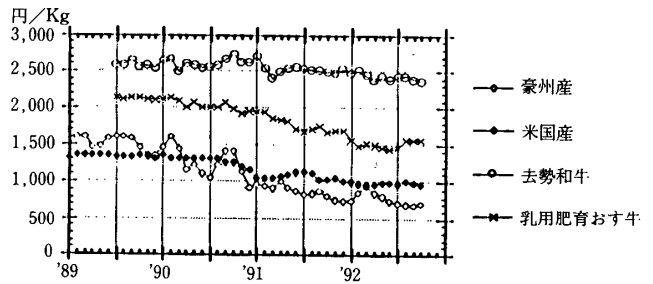
資料) 畜産振興事業団「畜産物市況週報」日本食肉流通センター「業務月報」食肉通信社「'91 数字でみる食肉産業」「'92 数字でみる食肉産業」

図8 「かた」の価格変動



資料) 畜産振興事業団「畜産物市況週報」, 日本食肉流通センター「業務月報」食肉通信社「'91 数字でみる食肉産業」「'92 数字でみる食肉産業」

図11 「うちもも」の価格変動



資料) 畜産振興事業団「畜産物市況週報」, 日本食肉流通センター「業務月報」食肉通信社「'91 数字でみる食肉産業」「'92 数字でみる食肉産業」

図-6に、1977年からの子牛価格の推移を示した。和子牛価格は1980年代前半まで4～5年の上昇期、2～3年の下落期を含むほぼ7年周期で上下を繰り返していたが、1980年代後半から6年間にわたって上昇を続け1989年には50万円を越す最高値を記録し、その後小幅ながら下降傾向を見せている。

次に乳用肥育おす子牛価格をみると、1981年から1989年まで上昇傾向を示していたが、1990年から下降傾向に転じ、1992年までに一頭あたり15万円以上のもの大幅な価格の下落を記録した。

2) 枝肉価格の変動

図-7は、中央卸売市場における各種枝肉価格の推移を示したものである。1970年度の枝肉価格はめす和牛・去勢和牛で約760円/Kg、おす和牛および乳用種で500円/Kg、であった。1970年代におす和牛を除

表2 国産牛と外国産牛の部分肉名対応表

日 本	ア メ リ カ	オーストラリア
かた	No.114 Shoulder Clod	Clod(Blade)
かたばら	No.120 Brisket Deckle Off	Brisket, Point end
かたロール	No.116 A Chuck Roll	Chuck Roll
ともばら	No.121 B Short Plate	Brisket, Navel end
ヒレ	No.189 Full Tenderloin	Tenderlion
リブロール	No.112 A Ribeye Roll, Lip-On	Cube Roll
サーロイン	No.180 Strip Loin	Striploin
うちもも	No.168 Top Round, Untrimmed	Topside
しんたま	No.167 Knuckle	Thick Flanck
らんいち	No.184 Top Sirloin Butt	D-Rump
そともも	No.170 Bottom Round	Silverside

資料) 全国食肉事業協同組合連合会「輸入牛肉のガイドブック (Part2)」

表3 自由化後の小売価格の動向

(単位: 円/100g)

区 分	国 産 (和 牛)								国 産 (その他)							
	通 常 価 格				特 売 価 格				通 常 価 格				特 売 価 格			
	かた	ばら	サーロイン	もも	かた	ばら	サーロイン	もも	かた	ばら	サーロイン	もも	かた	ばら	サーロイン	もも
91年 7月	537	419	1,164	582	435	327	968	476	342	268	638	399	284	203	494	313
10月	555	434	1,175	600	459	327	939	462	343	268	650	413	272	211	484	307
92年 1月	575	427	1,148	603	459	330	954	493	362	270	651	412	273	221	477	298
4月	568	406	1,170	599	443	319	969	496	349	267	666	410	271	196	490	303
7月	555	402	1,166	603	435	315	981	493	354	270	684	410	262	182	497	307
10月	559	405	1,159	600	440	327	935	481	356	275	646	403	260	208	494	314

区 分	輸 入 (豪 州)								輸 入 (米 国)							
	通 常 価 格				特 売 価 格				通 常 価 格				特 売 価 格			
	かた	ばら	サーロイン	もも	かた	ばら	サーロイン	もも	かた	ばら	サーロイン	もも	かた	ばら	サーロイン	もも
91年 7月	215	168	392	233	170	129	302	186	235	319	461	275	193	258	354	218
10月	219	169	409	245	181	149	300	181	231	304	464	306	177	223	355	225
92年 1月	223	168	407	243	174	147	308	184	244	312	465	324	193	235	374	212
4月	227	172	412	253	178	144	302	193	243	311	469	295	189	244	361	222
7月	222	163	408	242	176	132	308	174	241	306	453	282	182	236	349	210
10月	204	174	415	242	175	148	305	177	228	299	462	273	178	233	364	212

資料) 畜産振興事業団「畜産の情報」

く和牛は1,800円/Kg台へ、乳用種は1,800円/Kg台に上昇し、和牛と乳用種の格差は約600円にまで広がった。1980年以降和牛の価格はさらに上昇し、その価格は1990年2,200円/Kg台にまで達した。これに対し乳用種は1980年代は1000円前後の価格を保っていたが1990年以降急落した。これによって牛肉の品種間格差はさらに広がることとなった。

3) 部分肉価格の変動

図-8、9、10、11に1989年からの国内産・アメリカ産およびオーストラリア産部分肉価格の推移を示した。三国の部分肉の部位は、表-2の部分肉対応表に基づいて同一部位に揃え同一図内に納めた。和牛の「かた」では季節変動はあるものの、年次別では特に変化はみられなかった。しかし乳用肥育おす牛では1989年から1992年までで約500円/Kg程度の価格低下がみられた。また輸入牛肉においても価格低下はみられ、その幅は約700~800円となっていた。

「かたばら」においても同様の傾向がみられた。

「サーロイン」についてみると和牛では、1990年後半から1992年にかけて6,500円/Kgから7,000円/Kgという高い水準で推移していたが、1992年に入るとその価格は6,000円程度に低下した。また乳用種では、この間200~300円/Kg程度の価格下落にとどまった。輸入牛肉において、アメリカ産で400円/Kg程度低下し、オーストラリア産はこの間で約1000円/Kgとかなり大きく下がった。

最後に「うちもも」についてみると、和牛は自由化直前に約200円/Kg一気に低下し、その後さらに100円程度価格が下がった。また乳用種では、この間600~700円/Kgと大きく値崩れを起こした。輸入牛肉において、アメリカ産で400円/Kg程度低下し、オーストラリア産はこの間に800~900円/Kgとこれもかなり大きく下がった。

4) 小売価格の変動

小売価格のきめ細かい統計調査は、1991年7月から本格的に実施されたため、時系列分析および自由化前後の比較分析は不可能であるが、参考までに表-3に示した。前章で見たように部分肉価格は和牛の一部を除いてすべて低下しているにも関わらず、国産牛肉の小売価格の低下は和牛のサーロイン以外には見られず、乳用種に至ってはその価格はすべて上昇している。

輸入牛肉ではアメリカ産牛肉を中心に、オーストラリア産の「かた」(通常価格)・「もも」(特売価格)等もその価格を下げている。

結 論

牛肉の輸入自由化が国内牛肉経済に与えた影響をまとめると、次の4点を挙げることができる。第1に部分肉価格の低下である。輸入牛肉のほとんどが部分肉として日本に輸入されることは前にふれたが、牛肉の輸入量増加の過程においては他に先駆けてその影響を受けたのは部分肉取引相場だと考えられる。特にその品質の面で競合すると考えられていた乳用種を中心に、和牛の部分肉にもその価格低下傾向は見られた。またその傾向は、高級部位よりは低級部位において顕著に見受けられた。

第2に枝肉価格の低下である。部分肉価格の低下と共に枝肉価格の低下も見られ、特に枝肉評価の低いおす和牛・乳用めす・乳用肥育おすの順で価格の低下割合が大きくなっていった。

第3は子牛価格の低下である。この現象については、自由化時期がキャトルサイクルの価格下降局面にあったためという見方もあるが、和子牛価格の価格下落幅が比較的少ない事を考え合わせると、乳用種肥育牛の販売価格低下による肥育農家における乳用種肥育の意欲低下、それにとまなう子牛の買い控え等が最も大きな要因ではないかと考えられる。

第4に輸入牛肉の国内流通の多元化、つまり関税化によって税金さえ払えば誰でも自由に牛肉を輸入する事が出来るようになり、牛肉の流通経路の再編成が進み量販店等の他業種の参入が多くみられた。これには輸入牛肉の低価格性およびその加工のしやすさ等が参入を容易にしたためと考えられる。

これらの他に注目されるのは、牛肉の輸入自由化によつ卸売価格の低下がみられるにも係わらず小売価格が目立った価格低下は見られていないという点である。これは以前から問題となっている日本の食肉流通機能の複雑さ故の加工・流通経費の不透明さを如実に示している。

牛肉の内外価格差がやり玉に挙げられるなか、国内の生産段階のみではなく牛肉の加工・流通段階における効率化・短略化等の見当が今後の課題として残される。

文 献

- 1) 杉山道雄：鶏卵と鶏肉，市場解放と地域農業，1983.
- 2) 杉山道雄・小栗克之：畜産経営論－日本農業経営学会論「農業経営学の課題と展望」，日本経済評論社，1983.
- 3) 栗原幸一：酪農・肉用牛の近代化計画と牛肉の輸入自由化問題，「牛肉自由化と今後の展望」，農政ジャーナリストの会，1988.
- 4) 杉山道雄他：「畜産物生産流通構造論」，明文書房，1992.
- 5) 吉田寛一他編：「畜産物の消費と流通機構」，農文協，1986.
- 7) 社団法人全国食肉学校編：「食肉全科」，食肉通信社，1984.
- 8) 全国食肉事業協同組合連合会編：「輸入牛肉のガイドブック」(part 2)，1992.
- 9) 山口 勤：「肉の教科書」，富民協会，1989.
- 10) 新山陽子：牛肉流通と産業構造の変化，「野菜と牛肉の流通変貌」－食糧・農業政策研究センター，農村漁村文化協会，1992.
- 11) 「農業と経済」臨時増刊号，牛肉オレンジ自由化の総検証，富民協会，1992.